

◆実践問題25◆

(判官源義経は、合戦で負傷し瀕死の佐藤三郎兵衛を抱きかかえ言葉をかける。)

「思ひおく事はなきか」とのたまへば、「何事を
か思ひおき候ふべき。君の御世にわたらせ給はん
を見参らせて、死に候はん事こそ口惜しう覚え候
へ。さ候はでは、弓矢とる者の敵の矢に当って死
なん事、もとより期するところで候ふなり。なか
んづくに、『源平の御合戦に、奥州の佐藤三郎兵衛
嗣信と言ひける者、讃岐国八島の磯にて、主の御
命にかはり奉って討たれにけり』と、末代の物語
に申されん事こそ、弓矢とる身には今生の面目、
冥途の思ひ出にて候へ」と申しもあへず、ただ弱

- 1回目
- 2回目
- 3回目
- 4回目
- 5回目

りに弱りにければ、判官涙をはらはらと流し、「こ
の辺りに貴き僧やある」とて尋ね出だし、「手負の
ただ今おちいるに、一日経書いて弔へ」とて、黒き
馬の太うたくましいに、黄覆輪の鞍置いて、かの
僧にたびにけり。判官五位尉になられし時、五位
になして大夫黒と呼ばれし馬なり。一の谷の鶴越
をもこの馬にてぞ落とされたりける。弟の四郎兵
衛をはじめとして、これを見る兵者どもみな涙を
流し、「この君の御ために命を失はん事、まったく
露塵程も惜しからず」とぞ申しける。